

「主はわれらの救い」

エレミヤ書23章5-6節、マタイによる福音書1章18-25節

クリスマスおめでとうございます。正月ですが教会の暦ではまだ降誕節なので今朝もイエスさまのご降誕を共にお祝いしたいと思います。

18-19節「イエス・キリストの誕生の次第は次のようであった。

母マリアはヨセフと婚約していたが、二人が一緒になる前に、

聖霊によって身ごもっていることが明らかになった。

夫ヨセフは正しい人であったので、マリアのことを表ざたにするのを望まず、

ひそかに縁を切ろうとしていた」

ヨセフは「正しい人」でした。これは別に「立派な人」という意味で受け止めなくてもよいと思います。一人の婚約者を愛そうとしていた。どこにでもいる一人です。一介の大工の青年です。

でも彼は、婚約者のマリアを愛するがゆえに、ひそかに縁を切ろうとしていました。聖書は、結婚する前の性交渉を禁ずる掟があります。ですから、婚約中のマリアが妊娠するというのはいえない出来事でした。

「ひそかに縁を切ろうとしていた」(19節)。

ここにヨセフの本音を受け止めます。マリアを愛しているがゆえに表沙汰にはしない。

けれども一緒にいることはできない。自分を裏切った可能性のあるマリアと一緒にいることはできない。このまま結婚する道もなくなかなかたかもしれません。しかし、ヨセフは無理だと考えましたのです。マリアを愛するヨセフでも、この妊娠を本音では喜ぶことはできませんでした。

「ひそかに縁を切ろうとしていた」(19節)。

イエスさまがマリアの胎内に宿った。これこそ神さまの祝福でした。しかしそんなことは信じられないし、むしろ迷惑としか思えないそんなヨセフの姿がありました。

神さまの祝福の出来事を喜べない。

そんなヨセフの本音に、クリスマス进行を思います。クリスマスは、救い主イエスさまがお生まれになった喜ばしい出来事です。救い主来る。ぼくたちも、頭では喜ばしい出来事だと分かっています。でも、本音はどうか。どこかで「クリスマスどころじゃない」というひそかな想いがなかったかなと思います。この「喜ばしいクリスマス」を自分から切り離そうとしていなかいかなくて思っています。

めでたい日にそんな陰気くさいこと言わなくてもいいんじゃないかって思われるかも知れませんが、でも聖書は「ひそかに離縁しよう」としたヨセフの本音を隠さず語るんです。「離縁しよう」としたそういう本音を隠して「イエスさまの誕生おめでとう！」って言わない。陰気くさいぼくたちの現実を忘れさせるために「おめでとう」と言わせるのではないんです。だから、ぼくたちの本音に聞きたいなって思うんです。

### 「クリスマスどころじゃなかった」。

これが本音だったのではないかと思います。ぼくたちの現実、手放しで喜ぶことなんてほとんどありません。ぼくもクリスマス喜べないのではないかなと、そう思って準備してました。正直。この秋から冬にかけて、本当にいろんなことが起りました。ぼくの関わる教会の方々でも、二人の方の葬儀を行ないました。また今でも、病や衰えと戦う人がある、介護に子育て家族のことで悩む人がある、仕事で疲れている人がある。当日だって、クリスマスを一緒に祝いたいけど、体調不良や仕事で急遽来られなくなった方もたくさんおられました。ぼくもまた、本当に十分にクリスマスに備えられていなかったとそんな思いで迎えていました。

そういった中で、クリスマスを喜べない現実があります。

### 神さまの祝福の出来事を喜べない。

このヨセフに自分を重ねるんです。

ヨセフはマリアの胎に「神の子、救い主が聖霊の力で宿った」とは信じられなかった。むしろ、浮気されたと思い。「神さまなんで？」って思ったかもしれません。あるいは、マリアを愛していたヨセフであったからこそ、浮気された原因を自分に見たかもしれない。自分がマリアを愛していなかったからこそ、このようなことになってしまったんだって。自分を責めたかもしれません。

ぼくたちも同じです。

「神さまなぜですか」と思うようなことと多く直面する。しかし、次第に、その原因が自分にあったのではないかと悩むようになります。身に降りかかる苦しみ、悲しみ、不幸は、自分のせいではないか。罰があたったのではないか。神さまを信じるからこそ思います。神さまのせいではないなら、自分の愛が、祈りが、努力が足りていないからこんなことになったのだと。そして、だからこそ、努力してなんとか克服したいと願ってきたかもしれません。

ぼくもこの苦しい現実をどう乗り越えるのか。

それを聖書から聞きたいと思って、この箇所を読んでいました。一体どうすれば、苦しみを乗り越えられるのだろうか。どうやったらクリスマスを喜べるようになるのだろうか。

そこで最初はこう思いました。

ヨセフが信じるようになったように。天使をとおして語られる「神の言葉」を聴くことが大事。なるほど。そうやって聖書の言葉に熱心にきけば、幸せになれる。この箇所は、熱心に聖書の言葉に聞きましょう。そうすれば喜べるようになりますよ。そのようなことを語っているのだからって思いました。

でもこのみ言葉は、聖書を読めば幸せになれるなんてこと言ってないんです。

もちろん聖書を読むこと、み言葉を聞くことは大切です。でもヨセフが天使の言葉を、神さまの言葉を聴いたから「恵み」がやってきたんじゃないんです。

### 「マリアの胎の子は聖霊によって宿ったのである」(20節)。

ヨセフが聞いたから、救い主が宿ったんじゃない。

彼は「もうすでに宿っていたのだ」ということを聞いた。

そう。聖書が、天使が、神さまがヨセフに告げているのは、ヨセフにすでに「恵み」があることでした。あなたにはすでに「神の恵み」があるって告げている。

ぼくたちは、クリスマスどころじゃないと悩んだかもしれません。

クリスマスをなんか喜べないなとひそかに諦めていたかもしれません。あるいは、クリスマスを喜べない自分の不足を責めてきたかもしれません。

でも神さまは事実を告げます。

「恵みはここに宿ったのである」。そう。すでに恵みはある。神はあなたを見捨ててはおられない。だから、クリスマスの恵みは、もう喜んでいいんです。いま喜べることなんです。

真面目な方は思うかも知れません。

何もしないのに喜んでいいんですか？って。いいんです。だってヨセフは何かしたのではない。

ヨセフは、ただ夢をみただけで、むしろ神さまを信じないで離縁しようとしたんですから。

ぼくたちは自分の足りないことを数えるかも知れません。

あれもないこれもない。あれもできないこれもできない。そして、その不足が改善されれば、幸せになれる。喜べるって考えてきたかも知れません。

でもこのクリスマスの喜びは、足りないことが満たされた先にある喜びじゃないんです。

欠けが満たされて初めて幸せになれるっていつているのではない。病気が治らなければ、体調がよくならなければ、人間関係うまくいかなければ、幸せになれるのではない。聖書は、「イエスさまが共におられるから、あなたは、今、幸せだ」と告げる。

不幸ばかりが身に降りかかるから、あなたは神さまに見捨てられたとはいわない。  
不幸が身に降りかかっても、イエスさまはすでにあなたと共にいる、と伝える。悩みがある。労  
苦がある。悲しみがある。でもクリスマスの喜びは、いつもイエスさまと一緒におられることを  
確認するんです。

身に降りかかるあらゆる不幸。

その中で、神さまがいないかのように生きることを「罪」といいます。でもこの不幸の中にも、  
神さまがおられることをイエスさまはここで示されている。いや。そればかりかあの十字架とい  
う死にあっても、恵みがあると示してくださっている。

「この子をご自分の民を罪から救う」(21節)。

そう天使が告げたとおり、このお方が神さまと私を結んでくださる。悲しみ苦しみ痛みの中で、  
神さまを見いだせなくなるわたしたちです。それゆえに、自分を責めることすらあるわたしたち  
です。

でも「恵み」はすでにある。

ここにすでにイエスさまがおられるんです。だからこそいま喜べる。喜んでいい。あなたはすで  
に救われている。イエスさまが救ってくださっている。苦しいことだらけのあなたもまた救われ  
ている。何はなくても、わたしにはイエスさまがいる。そういえる喜びがあるんです。

クリスマスおめでとうございます。

みなさんの喜びをとおして、神さまの恵みが広がりますように祈りましょう。

父なる神さま、日々の忙しさ疲れ労苦悲しみの中で、あなたの恵みから自分を切り離そうとして  
いたぼくたちがいました。あなたの恵みから離れて、足りない自分の欠けをばかり数えているぼ  
くたちでした。しかし、あなたは告げてくださいます。その労苦の日々にこそ、イエスさまが共  
にいます。あなたは今、喜んでいいと。このクリスマスの恵みを感謝いたします。どうぞ、この感  
謝の内に、主のご降誕を祝い続けることができますように。

イエスさまのお名前によってお祈りします。アーメン